【研究論文】

イヴ・テリオーが物語る人間集団
―『孤独な者のためのものがたり』における人間と言語活動―

La tribu humaine contée par Yves Thériault :
l'être humain et le langage dans *Contes pour un homme seul*

佐 々 木 菜 緒
SASAKI Nao

Résumé

Paru pour la première fois en 1944, *Contes pour un homme seul* d'Yves Thériault a ouvert de nouvelles perspectives dans le paysage des contes québécois. En ce sens, cet article étudie le rapport entre l'être humain et le langage dans cinq textes de la nouvelle édition de 1965. Ces textes exposent respectivement des aspects cruels de la tribu humaine et des réalités absurdes qui sont inhérentes à l'humain. Nous étudierons cet imaginaire universel thériausien, à travers son primitivisme de l'acte de « conter ». Ensuite, nous nous pencherons sur les problèmes de communication entre les personnages qui rendent les situations tragiques. En analysant ces problèmes, nous monterons que, pour Yves Thériault, la condition humaine revient à errer entre le visible et l'invisible, entre ce que l'on comprend et ce que l'on ne comprend pas.

キーワード：イヴ・テリオー、『孤独な者のためのものがたり』、民話の物語形式、原初性、言語活動
Mots-clés : Yves Thériault, *Contes pour un homme seul*, forme du conte, primitif, langage

はじめに

1944 年に発表されたイヴ・テリオー（Yves Thériault, 1915-1983）の処女作『孤独な者のためのものがたり』（*Contes pour un homme seul*、以下『孤独な者』）は、ケベックの「ものがたり conte」[1] の地平に新たな視座をもたらした作品であるとされる（Lemire, 1982, p. XXIV）。『孤独な者』の新規性は、その口承的な語り手（conteur）の存在感から、ケベックの民間伝承文化の延長線上に位置づけられると同時に、ケベック文化の枠組みに収まらない異様なところ（étrange）、つまり、あまり「ケベック的」とはいえない側面に見出される（e.g. Émond, 1983; Carpentier, 1988; Mailhot, 2008）。従来の「民話 conte」が、ケベックの風土や慣習に関わる土着文化を象徴していたなかで、『孤独な者』という作品はその「民話」という概念を越えた、独自の「ものがたり」世界を形作っている。

ただ、上記のように『孤独な者』に備わった異様さについて論じられる際、議論の軸になっているのは民間伝承や土着文化の一部としての「民話 conte populaire」ジャンルであり、あくまでその観点から同作品を解釈し、位置づけることが試みられたものである。そのような議論において、テリオーにとって民話に着想を得た物語とはそもそも何を意味するのかといった疑問について、実際のテクスト分析読解をとおして考察した論考はほぼ皆無である。テリオーは民話を連想させる「ものがたり」の何に惹かれているのだろうか。その物語形式によって具体的にどのような世界観を描き出そうとしているのだろうか。

これらの疑問に答えるために、本稿では、テリオーにおける「ものがたり」の意味を、人間の原初的な言語の営みとしての物語るという行為とむすびつけてとらえてみたい。その物語る行為のなかで抽象化されたケベック社会、いわば現実の社会を象徴化したものとしての「人間集団 tribu humaine」[2] の様態を読解していく。テリオーが『孤独な者』で物語る人間集団は、コミュニケーションの不具合によってさまざまに対立し乖離する個人と集団で成り立ったものとしてあらわれる。これらの点について、同作品から 5 つの「ものがたり」を取り上げて検証してみたい。どの作品にも共通して、村の共同体内部やカップルの男女間における認識齟齬によってさまざまな悲劇的な出来事が引き起こされる、という現象が認められるのである。本稿で取り上げるテクストは、1965 年の新版に収録されている「金の壺」（« Le pot d’or »）、「アドリエンヌの過ち」（« La faute d’Adrienne »）、「トリファーニュの改悛」

（« La conversion de Trifagne »）、「政府の書状」（« La lettre du gouvernement »）、「ジャネット」（« La Jeannette »）、以上の 5 作である [3]。

1. イヴ・テリオーと「ものがたり」——物語る行為の原初性

テリオーにおける「ものがたり」の意味を考えるにあたり、まず彼が『孤独な者』を書いたときの状況を確認しておこう。1940 年代は、テリオーがケベックの地方のラジオ局でアナウンサー業や脚本を手がけ、またカナダ映画庁（ONF）でも脚本を担当する一方で、新聞や雑誌に掲載するための短いテクストや新聞小説、10 セント小説（roman à dix sous）と呼ばれる作品を大量に書きはじめた時期である。ただテリオーは、いわゆる「中央の」文壇との交流はほとんど持たず、当時の文学言説や思想潮流から自由で孤立した環境に身をおいていた [4]。この背景は少なからず、単純にケベックにおける民話に関する議論およびケベック文学の思想潮流に還元されえない彼独自の作品世界を理解する上で重要だといえる。とはいえ、本稿をとおしてみていくように、テリオーの作品は一見異様でケベック的でないようだが、彼の作品世界の根底にはケベック文学の想像世界と共有しうる同じ問いかけがある。いわば最も身近なものと最も疎遠なものが混在している。本章では、そのようなテリオーの作品世界の特徴を「原初性 primitif」という観点から考えてみたい。テリオーの物語空間において、現実の人間社会は単純化された社会として、つまり民話のように閉じた空間のなかで象徴的な「人間集団」となってあらわれる。この人間集団と「ものがたり」との関わりを明確化していきたい。

実のところ、テリオーにおける原初性はこれまでもしばしば議論されてきた主題である。ジェラール・ベセット（Gérard Bessette）はテリオーを「我々の小説家のなかで最も原初的で、最も〈アルカイック〉である」（Bessette, 1968, p. 111）とする。ベセットが注目しているのは、主に『アガグック』（*Agaguk*, 1958）や『アシニ』（*Ashini*, 1968）などテリオーの「先住民の物語」と呼ばれる作品群である。これらの作品にあらわれる先住民社会は、文明を象徴する西洋社会との比較のなかで、いわば未開的で神秘的な空間、あるいは聖書やギリシア神話の世界のような始原的な空間と結びつけて解釈される。ベセットは、これらの原初的な空間において、性や掟、伝統の継承をめぐる主題がどのように普遍化されているのかを読解している。ここで問題となっている原初性とは、西洋社会において古（いにしえ）をあらわす「アルカイック」の

同義語としての原初性である。それは、西洋文化の一部としてのテリオーの作品世界の源流および普遍性を捉えるような姿勢に還元される。

確かに、『孤独な者』においても旧約聖書や神話の影響が認められる[5]。しかし、テリオーと「ものがたり」の関係にある原初性とは、西洋文明の枠組みでの普遍性という意味よりももっと広く、古今東西人間社会の営みの根源にあるものという意味の普遍性とむすびついている。それは、物語る動物としての人間本来の営みの様態をとらえようとする視線に近いと考えられる。人間は日々の暮らしや経験、出来事を生きていくなかで、諸々の現実を他者と共有し受容するために物語る[6]。そのように物語る行為に内在された原初的な機能を形式化したものが民話である。人間社会の形成において物語が果たす機能については、さまざまな分野で多くの研究がなされているが、聖書や神話など「大きな物語」、つまり集合記憶の形成に関わるものが主である。一方、テリオーにとっての物語るという行為あるいは民話に着想を得た物語は、哲学者で物語論を論じた野家啓一が重視するような「小さな物語」の形成にたずさわる個々の体験、名もなき人間の生に関わっている（野家、2005）。テリオーの「ものがたり」とはこの意味での原初的な語りの営みとむすびついた存在であり、そこでの原初性は語りの営みの象徴といえるものである。テリオーにおける原初性は単に自身のルーツを探ることを意味するのではなく[7]、民話のように、人間の営みを原初的に表現することにも関わっている。

実際、テリオーが繰り返し自らを「物語る者 conteur」（Carpentier, 1988, p. 30）であるとし、「物語る conter」（Bérubé, 1980, p. 241）という行為を重視していることは強調すべきである。そして、『孤独な者』という作品が、人間の現実を抽象化し受容するための語りの営みとして書かれたといえる場合、そこにあらわれるのは象徴化されたケベック社会であり[8]、最小単位に還元された社会の姿としての人間集団である。『孤独な者』の人間集団は小宇宙的な村社会として描かれているため、保守的で閉鎖的なケベックの伝統社会像と重ねられられるかもしれない。だが、テリオーが書く小宇宙的空間は、そのような政治社会的な意味合いはもたず、あくまで人間社会が単純化された、人間の集合体の象徴だといえる。

では、テリオーはそのように人間集団を物語ることをとおして何を他者（読者）と共有しようとしているのだろうか。換言すれば、ケベック社会のいかなる性質を抽出しようとしているのだろうか。というのも、先述のとお

りテリオーは、ラジオや新聞、雑誌を媒体にして、かなり具体的にケベックの一般市民を読者として想定して書いていた作家である[9]。テリオーが物語る行為の原初的機能に惹かれているとすれば、抽象化された人間社会空間で展開する「何か」を、彼の読者層を占めるケベックの人々と共有しようとしている、つまり、そこには後者と共有しうる「何か」があるということである。結論を先に述べるならば、その「何か」は、ケベック文学の想像世界の根底に絶えず流れている自己存在への不安感、存在することへの孤独感や欠如感などの感覚と関わるものだといえる。

たとえば、20世紀初頭以降ケベック文学において、とくに詩を中心にして、「アメリカ大陸」という環境＝風景に主体としての自己を位置づけることが試みられている。ピエール・ヌヴー（Pierre Nepveu）は、過去との断絶やそれによって生じる孤独感や欠如感、あるいは根無草や異邦人としての生きる個々の経験、その苦悩や夢想などを内在した自己の有り様について考察している（Nepveu, 1998）。彼によれば、ケベック的な「場所感覚 sentiment du lieu」は、「自分たちの存在を取り囲む環境のなかに自己をいかに関係づけるのか」と憂える内的感覚と等しい。

本稿で取り上げる『孤独な者』の5作についていえば、問題となってくる環境は自然の風景ではなくむしろ人間社会であり人間集団である。しかし、テリオーの「ものがたり」における人間集団は個人と集団の構図としてあらわれており、そこで個人が集団にたいして抱く違和感は、上記のような自己と環境の関係の詩学と同じ問いかけを根底にもつことに由来するように思われる。たとえば、アンドレ・カルパンティエ（André Carpentier）は、テリオーの作品世界にあらわれる「剥奪 dépossession」という主題に注目して、問題となっているのはしばしばケベックのアイデンティティ言説で論じられるような文化的な意味の剥奪ではなく、「剥奪という概念そのものであり、その実体である」（Carpentier, 1988, p. 38）と述べる。確かにテリオーにおける剥奪の主題は、ケベックの歴史政治的な文脈ではとらえられないものである。だが、剥奪を内在する自己を書くこと、自己は剥奪状態で存在しているという感覚は、ヌヴーが考えるところの「場所感覚」と重なるのである。

実際、テリオーにおいて、集団の一部である個人は、集団に属しながらも属していない感覚、非－帰属感と呼びうる感覚を備えた存在としてあらわれている。さまざまに剥奪を内在した人間の姿は、次章以降詳しくみていくように、とりわけ登場人物同士の認識齟齬などのコミュニケーションの問題を

とおして描かれている。

2. 不協和な空間としての人間集団

テリオーにおける「個人と集団」に関しては、しばしば小説『アガグック』をとおして論じられてきた主題である（e.g. Brochu, 1974）。その場合、変化の時代における伝統的価値観や血統の継承の在り方に目を向けられることが多い。一方、『孤独な者』にあらわれる個人と集団は、人間社会における情報の伝達、意思疎通の在り方と関わっている。人間集団は、伝統的なケベック社会を想起させるような、個人の自由を抑圧し息苦しさを生じさせる存在ではなく、情報の共有という行為が欠けた人間関係のなかで、個人と集団の間に心理的な信頼感が存在しない不気味な性質を帯びたところである。そこでの個人は物理的に集団に属しながら心理的に属していない、集団の一部でありながらも一部ではないかのごとく不安定な感覚を抱いている。この点をみるために、まず「金の壺」を取り上げてみよう。

「金の壺」は、ヴェロニク（Véronique）が死後、夫のジェローム（Jérôme）ではなく彼の長年の浮気相手だったクドワ家の娘（la fille Coudois）に遺産を相続させるという話である。その「ものがたり」は次のようにはじまる。「ヴェロニクが死んだとき、戸棚に隠されていた、古い金貨でいっぱいになった壺が見つかった。間違いなく大金だった」（p. 115）。金の壺を見つけたのは村の人々（on）であり、その人々にたいしてヴェロニカが隠していたであろうことがこの冒頭からうかがえる。そして、この「ものがたり」は、金の壺を相続するのは誰か、ヴェロニクの遺志は何なのかをめぐって村の人々（on）が噂し、その詮議の過程のなかでヴェロニクという人間の知性や聡明さを再発見していくという筋書きである。本性を隠していたヴェロニクは集団を信用しない人間だといえるだろう。

「金の壺」は、夫を寝取られた無策な妻として集団から蔑まれていたと推測されるヴェロニクの立場からみれば、いわば夫と集団への復讐の物語といえる。ただ、物語が常に人々（on）の困惑した反応や挙動を中心に展開するように[10]、物語空間に漂うのは爽快さよりもむしろ異様さである。また、物語は、金貨を相続したクドワ家の娘が村を捨てて都会で「若く美しく、体格のいい夫」（p. 117）と一緒になることで終わる。ジェロームはあっけなく愛人に捨てられるのだ。しかも娘の結婚相手が美男風な様子から、ジェローム像はその反対であることがうかがえる。金もなく伴侶もなく容姿の魅力もな

いジェロームに遺されたのは虚無としての自己である。ヴェロニクはそのようにして夫の裏切りを断罪したといえる。

策士としてのヴェロニク像の真実がヴェロニク自身の死と金貨という村人を誘惑する物質の存在によってもたらされている点からは、個人と集団のゆがんだ関係の姿が引き出される。ここで描かれている人間社会とは、ヴェロニクのように個人が個人であるためには死ぬまで集団を警戒しつづけなければならないところであり、自身の存在を再認識してもらうためには集団の注目を集める金が要る、つまり双方は物質を媒介にして連結していくところである。常時、個人は集団に所属しながらも帰属意識を共有せず、人々の集まりである集団は複数の人間がただ物質的に存在しているだけのようである。そうして、人間という物体の表面と内面の不一致、つまり実体と内実が噛み合わない不協和な空間があらわれていく。この不協和な空間、「ここ」にいながら「どこか」にいるような憂いを帯びた個人の状態は、先述したケベックの「場所感覚」と共有しうるものではないだろうか。

そして、この不協和な空間は「ジャネット」および「アドリエンヌの過ち」でも、集団と個人間における情報共有の不在をとおして描かれている。実際「ジャネット」の村は「以前からずっと、口数が少ない」（p. 180）ところとしてあらわれている。テリオーの人間集団は、本来であれば集団意識を維持していく上で必要と考えられる意思疎通や情報の共有を十分に行わないのである。そして、「金の壺」も含めて、特定の人物の人格をめぐって予想外の事態というものが共通してプロットの中心になっている。個人は集団に属しながらも、さまざまな断絶、先のカルパンティエの表現を借りればさまざまな「剥奪」のなかに在る人間としてあらわれていく。そのような個人と集団の関係について、次章では、「アドリエンヌの過ち」と「ジャネット」における男女のカップルに焦点をあてて考察を進めていきたい。

3. 男女のカップル——個人の疎外

「アドリエンヌの過ち」は、ある春の日、むしのしらせのように主人公のダニエル（Daniel）が妻アドリエンヌ（Adrienne）の不義を悟るという場面からはじまる。この「ものがたり」は、アドリエンヌの不義について彼以外の村人全員は知っていたことが発覚するという筋書きで展開する。以下に引用するのは、畑仕事をしていた長老イレール（Hilaire）のところにダニエルが相談しにやってきた場面である。

— アドリエンヌがどうかしたのかい？
ダニエルは肩をすくめた。
— 彼女がどうかしたのかじゃなくて、なんかしたんだ。
— 一体なにを？
— 俺を裏切りやがった。
イレールは柵に肘をついて地面をみつめながら、つぶやいた。
— アルセーヌと …。
— 誰から聞いた？
— 知っていたんだ。ここの連中はみんな知っていたさ。
— それなのにだれも俺に教えてくれなかったのか？
— おまえが自分で知るのが大事だったんだ。その方がよかったんだよ。
（pp. 131-132）

イレールによれば、自分たちがダニエルに知らせなかったのは私的な事柄に干渉することのないよう気遣ってのことのようである。ただダニエルの憤怒には、単に妻が不義を働いていることや、自分一人だけ知らなかったということの他に、集団あるいは夫婦という共同体から逸脱した立場を強いられたことにも起因するように思われる。たとえば、上の引用のダニエルのことばに「裏切られた cocu」があるが、同じ表現が他の箇所にもみられ[11]、重要に思われる。このことばはそもそも「寝取られた男」を意味し、しばしば周りから後ろ指を指されるという意味合いで用いられる表現である。したがって、その表現には、妻にとっての夫という二人称的な視点でとらえられる自己ではなく、三人称的な視点でできた自己像が備わっている。「寝取られた男」とは、他人（妻と不倫相手）の行動と他人（世間）の視線で新たに位置づけられた自己のことであるという意味で、三人称的な認識でできた自己をあらわすといえるからである。

そして、「ものがたり」の終盤、ダニエルは「寝取られた男」としての立場から夫としての自分を取り戻すかのように、アドリエンヌと自分のお互いの腕を鎖で繋ぐ。鎖は、文字どおり 2 人を繋ぎとめる道具であり、夫婦という共同体から自己が疎外されることを防ぐよう機能している。ここでも先の「金の壺」と同じように、物質を媒介にして連結された異様な人間関係がみられる。この繋がった状態はアドリエンヌが亡くなるまでの 30 年間維持される。このダニエルの歪な行動は、諸々の集団内で自己の立場が失われるこ

とへの恐怖感に、極端なかたちで対処した姿だといえる。目に見えるかたちで共にいない限りは信用しない人間の心理が具象化されているともいえるだろう。あるいは、繋がりが目に見えていても信用できない人間の姿ともとらえられる。いずれにせよ、ダニエルとアドリエンヌの異様な繋がり方は、自己を取り囲む環境にたいしてしばしば人間が同時に抱く存在感と非－存在感が合わさった複雑な感覚を連想させる。これら連結と非－連結、存在と非－存在の間に生きる人間の姿は孤独という状態と一心同体なものとなっていく。事実、テリオーが『孤独な者』のなかで繰り返し情報共有の欠如状態によって書いているのは、さまざまな「非」から成る孤独としての個人の有り様である。個人は、集団という複数の人間の間に実体的に在ると同時に、内実的には彼らと共には在らず、孤独な個体存在として描かれている。この種の孤独のモチーフは、次に取り上げる「ジャネット」においてより強くあらわれている。

「ジャネット」は、主人公の漁師ダヴィッド（David）が娘のジャネット（Jeanette）の逢い引きを、ある日仕事帰りに他人から知らされるという話である。ジャネットは村一番の美人で、ダヴィッドは自慢の娘をいつか良い人に嫁がせたいと胸を躍らせながら過ごしていた。以下の引用は、お店ですれ違ったラメック（Lammec）に話しかけられた場面である。

> ラメックは小声で笑いながら視線を、笑っていないダヴィッドの視線にしっかりすえていた。
> — ダヴィッド、なにも待ち望んでないってのはほんとかね。それはどうなんだろうね…。
> — なにを言いたいのかさっぱり分からんよ。
> — ジャネットが…。
> — ジャネットがどうしたって？
> — 予想外のことってだれにも起こるよな。
> […]
> — さっさとそのでたらめを吐き出せよ！
> — でたらめじゃないよ。村人中が知ってるよ、おまえ以外。おまえのとこのジャネットがうろうろしてる。ルイがものにしたって、波止場中で自慢してたんだよ。子どもができたってまで…。（p. 182）

ここでも「アドリエンヌの過ち」のダニエルと同じく、ダヴィドだけに情報

が共有されていなかったという状況が認められる。どちらにも「知らなかった者」として集団の除け者になっている状況がある。ただし異なるのは、ダニエルが自ら悟ったのにたいして、ダヴィッドは完全に他人から教えられている点である。加えて、引用の冒頭から分かるように、ラメックは何も知らないダヴィッドを嘲笑している。つまり、「ジャネット」では「アドリエンヌの過ち」よりもはっきりと個人は集団から疎外されており、それによって双方の関係はより対立化された構図であらわれている。そこには、特定の情報について「知らない」個人を生み出すことによって、「知る」者として優位性を作りだすような集団への違和感がみられる。

この違和感は、特定の情報をめぐる共犯関係に支えられた集団という性質に向けられたものである。まるで人間集団とは、ことばでコミュニケーションをとる動物であるがゆえに、「知る者と知らない者」の格差が生じる場であり、何かの情報をめぐる共犯関係に支えられたもののようである。事実、テリオーにとって、自己を取り囲む環境（entourage）としての「人間集団は敵意に満ちたもの」（Bérubé, 1980, p. 235）であるという。『孤独な者』にあらわられる人間集団像は、そのように自己の周囲にたいする極度の不信感とむすびついており、繰り返し「知る者と知らない者」の関係をとおして描かれる。さらに、それは男女という個人と個人の関係に集約されるかたちでもあらわれている。つまり、ダニエルとダヴィッドの身に起きているのは、各々の女性（妻および娘）にたいする認識の齟齬、錯覚だったことの露呈である。女性たちは男性たちの予想外の行動をとり、どちらも期待を裏切っている。このように、男女のカップルにみられる認識の齟齬をとおして、テリオーは、一人の人間にとって最も身近な存在の家族でさえお互いに未知の存在であり、完全な他人である様を書いているといえる。換言すれば、人間という一存在が孤独そのものであることを浮き彫りにしている。

このような男女のカップルをとおして読解される孤独としての個人像について、次章では、「トリファーニュの改悛」および「政府の書状」にあらわれることばの機能に注目して掘り下げてみたい。自己と世界を関係づけるためのことばは、テリオーの人間集団においてはお互いを乖離させるよう作用していく。

4. 世界の剥奪としてのことばの機能

『孤独な者』にあらわれる男女のカップル像は、人間集団の小宇宙的な

舞台として、かつ人間同士の関係性の象徴としてとらえられる。その関係性は、ことばを持つがゆえに、不確定で孤独な現実に在る人間の姿（réalité humaine）をあらわにするものである。そもそも人間は、ことばの能力によって名づけるという行為が可能であり、そのようにして秩序を生み出し、世界を所有し（野家、2005、p. 209）、そうして規範に即した社会を維持することができるのだろう。世界を所有すること、社会に生きるとは、合理的な世界観のなかで未来を予測すること、ひいては他人の言動を予測、受容しながら自分の存在を関係づけることといえる。前述の野家のことばを借りれば、「ものがたり」の機能とは「理解不可能なものを受容可能なものへと転換する」（野家、2005、p. 316）ことに見出される。一般的に民話はそのような人間とことばのいわば信頼関係を物語る[12]。しかし、テリオーの「ものがたり」においては、一人一人の人間が孤立して個々に思考することができるがために、人間同士の関係づけに限界が生じており、時には関係づけ自体が不可能なものとなっている。人間と世界を関係づけると思われることばは、皮肉にもお互いを孤立化していく。この点を、「トリファーニュの改悛」にあらわれる男女のカップルとことばの関係に注目して検証してみたい。

「トリファーニュの改悛」は、主人公のみぞ知るという流れで展開する話である。物語は、怠け者で片足が不自由なトリファーニュ（Trifagne）が真面目な働き者になり、普通に歩くようにもなるというものである。先述の「金の壺」のように、彼の変貌にたいする噂話や評判、賛否両論などの描写をとおして集団（on）から見える個人像が再び扱われている。主人公の変貌の裏には、エステール（Esther）に一目惚れしたことがある。彼はそのことを誰にも話さず秘密のままにし、来るべき日のために邁進する。つまり、彼は未来のために密かに合理的行動をとっているといえる。物語の終盤で、トリファーニュにとってのその機会が訪れる。以下に、エステールがトリファーニュの家の前をゆく場面を引用してみよう。引用場面をとおしてみていきたいのは、この男女のカップルが、それぞれ別世界に属する 2 種類の個体のようにあらわれている様である。

> 夢のようなことが現実になろうとしている。
> そうして、彼は抑えきれず、エステールがぼーっとして通り過ぎていくので、声をかけた。
> ― エステール…。

けれども、彼女は歩きつづける。
だから彼はほとんど叫びながら
— エステール！
けれども彼女は奇妙な自分の世界に浸っていて、彼の声が聞こえなかったのだ。
（p. 145）

「夢のようなこと」とあるように、この瞬間を主人公が待ち望んでいたことが分かる。しかし、彼が「エステール」と 2 度呼びかけても、彼女はまるで別次元にいるかのようにその声が聞こえておらず、2 人はお互いに別々の世界に属しているようである。別々の世界に属するということは、別々に思考していることを意味する。この個々に思考する存在としての人間と人間の関係が「エステール」という名前の呼びかけを軸に表現されていることは象徴的である。まるで「エステール」という名前は、彼女が属さない世界によって名づけられた名前であり、彼女自身にとっては異質の名前であるかのようなのだ。エステールでありながらエステールではないような存在が浮かび上がってくる。実際、物語においてエステールなる人物は一度もことばを発しておらず、彼女の人物像は村人の視線および彼らのことばのみによってとらえられている。

ことばをもつ人間に内在する孤独の姿は、物語の結末においてより決定的にあらわれていく。トリファーニュが波打ち際に腰かけているエステールにむかって 3 度目の呼びかけをするが、エステールは彼の存在に驚き、均衡を崩した結果、海に落ちて死んでしまう[13]。つまり、自分の望みを叶えようとした者が自分の手で意図せず相手を死に追いやっている。この結末は、単なるすれ違いやコミュニケーションの不在といった問題をはるかに超えた人間存在の孤独をあらわしていると考えられる。ことばによって成される理想や予想を内面に抱きながら、絶えずそこからこぼれ落ちる現実のなかに生きている人間の孤独である。そのような不安定で不確かな人間の生がトリファーニュとエステールのカップルの関係において具象化されているといえる。このように、テリオーの「ものがたり」においては、人間と世界をむすびつけるはずのことばは人間を孤立させ、人間の生に内在する孤独をあらわにするよう機能する。ことばは人間から世界を剥奪しているともいえる。その剥奪としてのことばの機能について、最後に取り上げる「政府の書状」をみながらさらに考察を深めていこう。

「政府の書状」には夫と妻が登場する。物語の後半、妻は政府から届いた息子クロード（Claude）の戦死通知のことをやっとの思いで夫に打ち明けるが、夫はすでに知っていたことが分かる。ここにも「知る者と知らない者」という構図が等しく認められる。ただ、ほかの「ものがたり」と違って、「政府の書状」では双方の対立や乖離というよりも、得た情報をいかに受け取るかが問題になっている。男女のやり取り、つまり個人と個人のコミュニケーションをとおして、ことばの力で事実を超越しようとする意志や、新たな現実を築こうとする姿勢が読解される。たとえば、以下の引用にみられるように、政府から届いた情報の真実性をめぐって夫婦はことばを交わしながら、その現実を拒否していく。

> ― おまえに話さなかったのは、死んだなんて信じてないからだ。
> ― 信じ…
> ― そうだ、信じない。だって見たのか？政府は遺体を見せてくれなかっただろ？クロードみたいな頑丈な奴がそう安易と殺されると俺に思わせたいのか？ドイツ人がクロードを殺すなんて並大抵のことじゃないんだぞ！奴は死んでない、俺がそう言うんだ。遺体を見ないかぎり、俺は信じないからな。別の戦争で、いとこのフィルマンは死んだと思われていたことがあった。政府が彼の女房に通知したりしてたけど。そしたら 18 年に不意に姿を現しただろ。前と変わらず威張り屋で。クロードのことも同じなんだよ…。あり得ないだろ、十人力の、たくましい男がよ…（p. 174）

戦死通知書にたいして、夫婦はお互いにことばを交わしながら、彼ら自身のことばによって別の現実を構築することが試みられている。テリオーの「ものがたり」において、いかに「ことばにする」という行為が現実の受容と関わることとしてあるのかが分かる。

政府の書状が提示する現実と夫婦が作りだす現実――前者を「でたらめ」と位置づける夫婦のことばによって、この 2 種類の現実の位置関係は転倒されていく。妻は夫が主張する現実を受け入れるかどうか「一瞬とまって考えた」（p. 175）結果、通知書を破って暖炉に捨てる。ここで「夢想、空想する」を意味する動詞 « songer » が使われていることは象徴的である。そこには、まるで合理的に思考できるために、非合理なものこそを現実として構築することができる人間の姿があらわれる。その姿は、ことばをもつ人間とは、論

理的であるがゆえに非論理に囚われているかもしれないことを示している。言語活動に潜むこの種の葛藤で成り立っている人間存在の様態を、作者テリオーは男女の関係、彼らとことばの関係とおして書いているといえるのだ。

最後に、この物語が夫婦によって「ええい、嘘つきどもめが！」(p. 175)という政府を非難することばで終わることに注目したい。彼らは政府のことを、でたらめを語る嘘つきと呼び、自分たちは「まったく、うちらは馬鹿じゃないのに…！」(p. 174) という立場をとる。そのように政府を非難する彼らの姿は、直面できない現実をありえない現実で置き換えている人間のそれであろう。そのように現実を置き換える彼らは、いわば自らのことばで自らの現実を剥奪しているといえる。この夫婦は、自身が属する現実を受容するために、自ら現実を剥奪してしまう人間の矛盾や不条理を具象化していると考えられる。そして、この夫婦とことばの関係にみられることばの限界は、ケベックの「場所感覚」の観点からとらえれば、自己と環境を関係づけていくなかで、つまり物語りながら世界を受容していくなかで絶えず経験する限界や不確定で不穏な内的感覚とむすびつくのである。

おわりに

以上、『孤独な者』の 5 つの「ものがたり」にあらわれる人間集団の諸相について、個人と集団、男女および彼らとことばの関係に注目しながら考察を行った。本稿では、人間集団を、ケベック社会、より厳密にいえばケベックの内的世界を抽象化・原初化したものとしてとらえて、どのように作者テリオーが「ものがたり」をとおしてケベックの想像世界と共有しうる問題である自己と環境の複雑な関係について書いているのかを検証した。その関係の比喩として『孤独な者』における個人と集団は、情報共有の不在によってその繋がりが解体されており、そこでの個人は集団に属しながら非－帰属感を内在した人間の姿を呈していた。そのように共存しつつも共存していない状態を内包した人間集団の有り様は、「金の壺」や「アドリエンヌの過ち」では目に見える物質（金や鎖）を媒介にしてつくられた異様な繋がり方にあらわれていた。

他方で、人間集団は繰り返し情報をめぐって「知る者と知らない者」という構図のなかで展開しており、集団から疎外される個人、さらには孤独な人間の生としての個人の有り様が「ジャネット」をとおして読解された。この孤独の主題について掘り下げるために、「トリファーニュの改悛」と「政府

の書状」にあらわれる男女のカップルとことばの関係に注目した。すなわち、テリオーの「ものがたり」において男女のカップルは限りなく個人と個人の関係を象徴化した存在としてあらわれている。その関係とは、ことばによって各々の思考を可能とし、そのために孤立して世界にただ在るような人間と人間の関係である。最終的に、世界と自己を関係づけるべきことばの機能は人間自ら世界を剥奪していくという矛盾したものとなっていった。いわばことばの限界を書くことをとおして、テリオーは、いかに環境のなかに自己を位置づけられるのかといった試みのなかで抱きうる個々の孤独感や疎外感、関係づけ自体への限界など、ケベックの想像世界が抱える複雑な「場所感覚」を書いているといえる。この現実を認識し、向き合い、受け入れるために物語っている、ともいえる。まるで「物語る」という論理的な行為をしながら、その限界を自ら暴いているかのようである。

そして、上記の点をふまえれば、『孤独な者のためのものがたり』とされた題名は 2 つの意味で興味深い。1 つ目は、ケベックというアメリカ大陸に在ることがさまざまな孤独という感覚を内的に抱いて生きることと密接であるとすれば、そのような感覚を読者と共有するための「ものがたり」といえること。2 つ目はより普遍的に、人間にとって言語活動をとおして形作られる世界に存在することがさまざまな剥奪を意味するとすれば、この存在論的な憂いを一人一人の読者と共有するための「ものがたり」であるといえるのである。

（ささき　なお　白百合女子大学非常勤講師）

付記　本稿は国際ケベック学会（AIEQ）とケベック文学・文化大学共同研究センター（CRILCQ）による Bourse Jean-Cléo-Godin の助成を得てなされた研究 « Étude des contes d’Yves Thériault : la quête de soi sous la forme du conte » の成果の一部である。

注

1　本稿における « conte » の訳語については次のとおりである。民間伝承のような狭義の民話には「民話」を、民話に着想を得た物語としての広義の民話には「ものがたり」を用いる。

2　「人間集団」はテリオー自身が人間社会の様態を象徴的に言い表すために用い

ている表現である（Bérubé, 1980, p. 235）。

3　1944 年の初版では 19 編（うち 16 編が書き下ろし）が含まれていた。1965 年の新版では、「お月さま」（« Le titre-lune »）と「金の壺」（« Le pot d'or »）の 2 篇が追加され、「神さまへの祈り」（« Prière au bon Dieu »）が削除された。現在では新版が確定版とされているため、本稿でも同版を扱う。テクストの引用は HMH 版（Thériault, 1982）に準拠し、ページ数のみ示す。

4　テリオーと文壇の関係については、ドゥニ・カリエ（Denis Carrier）の論考に詳しい（Carrier, 1988）。

5　たとえば、「お腹の虫」（« Bête-de-ventre »）という「ものがたり」は、創世記のアベルとカインの物語の書き換えである。ほかにも動物や木や月、海といった自然界の存在物の描写はしばしば神話の世界を彷彿させる。

6　本稿では「物語る」および「語る」に関する概念は、野家（2005）に依拠する。

7　テリオーは彼自身がインタビューで語っているように、先住民の祖父をもつ（Bérubé, 1980, pp. 223-224）。ただし、その主張に確かな裏付けはないとの見方もある（Hesse, 1993, p. 2）。

8　本稿で取り上げるテクストでいえば、山間や海沿いの村を舞台にしており、時折ガスペジー地域を思わせる。また、キリスト教的な要素や第二次世界大戦中の徴兵への言及などに、ケベック的な文脈をみることができる。

9　事実、「［テリオー］は書くとき決して読者の存在を忘れなかった」（Carpentier, 1988, p. 37）ことは重要である。

10　たとえば以下のように、地の文に備わった視点は人々（on）である。« *On* concluait sans effort » (p. 116, nous soulignons) ; « *On* fit donc liesse un soir entier et, le lendemain, *on* entendit avec grande attention ce que lisait le tabellion » (p. 116, nous soulignons).

11　同じ表現は以下の箇所にみられる。« Nul n'aurait pu dire que le Daniel n'était pas *cocu*. Il l'était » (p. 129, nous soulignons) ; « Viens-y voir, si tu me feras encore *cocu*, ma belle ! » (p. 134, nous soulignons).

12　しばしば民話では登場人物や物事の呼称をめぐる謎かけが展開するように、名前の獲得が重要なモチーフになっている。そこではことばと人間の安定した関係が書かれている。

13　先述のとおり、作者テリオーが、口承的な語り部を連想させる行為の「物語る conter」ことを重視していた点をふまえれば、ここにあらわれる数字の 3 に関わるモチーフは象徴的である。というのも、民話では主人公の運命は往々にして同じ出来事が 3 度繰り返されたときに決定される（小澤、1999、p.84）。た

とえば、グリム童話の原板『白雪姫』では主人公は継母の 3 度目の訪問で死ぬ。展開は異なるものの、「トリファーニュの改悛」でも 3 度目に決定的になっている点は共通する。

参考文献

BÉRUBÉ, Renald (1980) « 35 ans de vie littéraire : Yves Thériault se raconte », *Voix et images*, vol. 5, nº2, pp. 223-241.

BESSETTE, Gérard (1968) « Le primitivisme dans les romans de Thériault », dans *Une littérature en ébullition*, Éditions du Jour, pp. 109-216.

BROCHU, André (1974) « Individualité et collectivité, dans *Agaguk*, *Ashini* et *Les commettants de caridad* », dans *L'instant critique 1961-1973*, Leméac, pp. 156-205.

CARPENTIER, André (1988) « Yves Thériault et la fiction brève (Quatre remarques préliminaires à la réception des contes et nouvelles d'Yves Thériault comme objets d'étude) », *Études littéraires*, vol. 21, nº1, pp. 27-43.

CARRIER, Denis (1988) « Yves Thériault et la critique », *Études littéraires*, vol. 21, nº1, pp. 159-171.

ÉMOND, Maurice (1983) « Le fantastique au Québec : Le XXe siècle », *Québec français*, nº50, pp. 26-31.

HESSE, M. G. (1993) *Yves Thériault, Master Storyteller*, Peter Lang.

LEMIRE, Maurice (dir.) (1982) *Dictionnaire des œuvres littéraires du Québec*, Tome III (1940-1959), avec la collaboration de Gilles DORION *et al.*, Fides.

MAILHOT, Laurent (2008) « Préface », dans Yves THÉRIAULT, *Contes pour un homme seul*, Dernier havre, pp. xi-xxxiii.

NEPVEU, Pierre (1998) *Intérieurs du Nouveau Monde : essais sur les littératures du Québec et des Amériques*, Boréal.

野家啓一（2005）『物語の哲学』岩波現代文庫。

小澤俊夫（1999）『昔話の語法』福音館。

THÉRIAULT, Yves (1982) *Contes pour un homme seul*, HMH [1965]. Édition originale : Éditions de l'Arbre, 1944.